空襲と被災

国内戦場体験に思う

松野敏男（五九）

私は開戦当時小学校三年生でありました。

戦争体験といっても戦場ではなく、国内が戦場化した米軍機B29との遭遇でした。わが国の軍国主義教育の徹底により三年生ながら小さな胸が高まり、異様な緊張におかされていたことを思い出します。戦争の悪化につれて六年生の初期に集団疎開（生命保全のため安全な田舎への移動）が実施され、両親と離ればなれになり、各寺院での集団生活に入ったわけであります。当時は、食糧難で育ちざかりの私たちは、ひもじい思いをいたしました。しかし、何か月かに一回親との面会があり、親達は苦しい生活の中で食物を持参し、食べさせてくれたのです。母との対面に喜ぶどころか、この小さな胸が熱くなり涙がとめどなく流さずにはおられなかったことを、今でも脳裏にやきついています。ほんとうにその時の状況は言葉では表現できません。幸い疎開先で空襲とはいっても唯上空を通過するだけで、当地での不安はありませんでした。戦況は日増しに悪化し、私は六年生中学進学のため、昭和二十年一月に大阪へ戻り、ようやく母と共に生活するようになりました。これからが、大阪は戦場となったのです。

米軍は、小笠原基地にB29爆撃機を待機させ、日本への攻撃が容易になったわけです。ひどいときは、警戒警報が三日間つづき、学校も休校の連日でした。そして二十年三月大阪にB29が襲来し、焼夷弾攻撃やら爆撃などをうけ、一面焼野原となったのです。私は大阪被爆の翌日三月十四日が卒業式だったことを覚えています。昨日の恐怖もそのままにやはり卒業式はうれしかった。それから幾度となく攻撃に見舞われ、もう

ここまでくれば、何処で生命を失っても怖くない。母と共にリックサックを背負い安全な場所（どこが安全だと保障できるところは正直いってない）へ移り、攻撃が終るとまた自宅へ戻るといったそんなくり返しの毎日でした。日常夜半時に目を醒ますと、必らず警報のサイレンが聞えてくるのです。自然に目をさます習性が身についていたのです。しかし、重なるたびにもう起きる気もせず、B29の攻撃中でも母と共に「どこで死ぬのも同じや、もうこのまま寝ていよう」などと口ずさみながら、過した日々もありました。とにかく大阪へ戻ってからの体験はきびしいものでした。もう生きた心地はせずゴーゴーという爆弾投下の音が頭をよぎり正に無抵抗の戦場といえます。B29百機の攻撃も時をおいて一機ずつ襲ってくるわけですから長時間にわたり恐怖を与えられ逆に超越していつでも生命を捨ててやる、そんな気持になったものです。何よりショックをうけたのは、朝、顔を合した学友が午後にはある場所で米軍の攻撃（機銃掃射）にあい、亡なっている。一分一秒先のことがわからないほどの恐怖がどこにありましょう。この体験こそ口で言っても駄目、体験がすべてを物語るわけです。〝日本は絶対に勝つんだ〟この一言でつっぱってきた当時の教育のすさまじさを感じます。これからは、過去の体験を現代未来に生かすためにどうすればよいのか。戦後四十六年だんだんとその恐怖が風化されてくる時代になるものの当時の貴重な映像（フイルムなど）資料は永久保存し、アピールすることで、平和の尊さを教えることが必要である。

平和と戦争は、紙一重、この意識をもつこと今や世界はひとつ、平和維持のため国連の強固な基盤に期待すると共に日本独自の心構えは言及をまたない。平和は決して安泰ではない。それをどう支えていくか、私たちのこれからの使命ではないでしょうか。

（興戸在住）

異状な心理

岡本初子（六七）

だんだん空襲警報の入る回数が増して来た昭和十九年（一九四四年）、私の住んでいた名古屋付近は東海地震と空襲、両方の為に夜何時でも逃られる服装で、入口は開けたまま三〇センチ位に降り積った雪の日も炬燵を中心に寄り合って寝ていました。夜、警戒警報が出ると暗幕（厚いカーテン）を窓にひき、電燈を黒い布で蔽い、ラジオも光が家の外に出ないようにします。夜の空襲には、近所の足が弱くて走れない方々やお年寄りと一緒に、私は自転車に座布団や毛布、炒り豆等の食料を積んで、町はずれの田圃へ退避しました。四日市方面の空一面まっ赤です。その中に飛び交う飛行機やバラバラ落ちる爆弾が見えます。パノラマを見ているような光景です。あの火の下で大勢の人が逃げまどっているのだとの思いに、誰も何一つ声も出さず見守ります。今夜はこちらではなかったと眠気が重くのしかかります。岐阜市が爆撃を受けた日、空襲警報解除と共に、たまたま家にいた父と親戚を探しに出かけました。幸い電車は走っていて名鉄岐阜に着くと見渡す限り焼け野原です。こんなに水があるのにと思う程豊かな長良川と道路を頼りに探し歩いていると、黒くこげてくすぶっていた電柱から又、勢よく火を吹きました。

焼け跡の一角でバケツをさげた三十代の男の人を見つけて父がお見舞いを言うと、その人はむしろをのけて、「子供と家内です」と。その人はうつろな笑顔を見せました。髪は焼けてありません、赤茶けた顔の子供、女か男かもわかりません。はじめて目の当りにした焼死体と悲しみの極みにある人の顔が笑みを漂わせてい

たのは何故でしょう。毎日何回となく出る警戒警報、空襲警報に慣らされて、皆それぞれ通学したり通勤したりしておりました。胸には住所氏名、生年月日、血液型を書いた布をぬいつけ、防空頭巾を肩からかけて。私は名古屋大学医学部栄養士養成所に通学していましたが、名鉄津島線に乗るのも押し込まれるように力のありそうな人の前に割り込むように並びます。入口扉の裾は、レールからはずれてふわふわしていて鉄橋を渡る時など必死で車内の方へ押していました。空襲になると電車は止まり車外に飛び降りて身を伏せます。市電では空襲警報になると市の周辺方向に全速力を出します。敵機が近づくと停車し乗客は飛び出して遮蔽物を見つけます。間に合わない時は側溝などに飛び込んでなるべく身を低く伏せて爆風をよける姿勢になります。「ドドーン」という音と地震のような揺れに両手で耳と目を押えて息も、思わずつめておりました。授業中の空襲警報では担架を持って防空壕の上で待機します。大学病院の患者の為です。B29が青空に白い飛行雲を引いています。「こんなにきれいな空なのになあ」と思いながら、級友の欠席が続くと、何かあったのです。欠席のまま遂に現れない人も珍しくありませんでした。

昭和二十年三月四日卒業式の日は朝から空襲警報になり出るのを見合わせました。警報解除になると、名古屋に近い津島では運送屋のトラックが近所の男の人達を乗せて名古屋市内に応援に行かれました。男子学生達も乗って行きました。夕方帰って来られた話では市の外周から爆撃がはじまり中心部へいった様で逃げられず沢山の人が死んだらしい。ちぎれた手や足がどれが誰のものかわからないまま拾い集めたと、皆あまりくわしい話はせずに、また次の空襲に備えて家に入りました。木曽川の鉄橋が爆撃で落とされないうちに祖父の家田辺町大住に集まろうと、不要不急の乗車制限のあった汽車の切符を知り合いを通してやっと手に入った八月十五日、列車には若い将校さんがずらりと座っていました。任地に移動されるのかなと連結部の

通路に立った私達は思っていました。昼過ぎやっと家に帰り着いたら、「戦争が終った」と聞かされ思ったことは「ああ今夜から眠られる」と。二十歳を迎えたばかりの戦争も死も深く知らない年頃に体験した戦争でした。

（大住在住）

わたしの戦争体験

長井ハナ（八九）

十二月八日真珠湾攻撃の報に大きな衝撃をうけました。その後、いつの間にか聖戦と呼ばれ私もそう思うようになりました。

「富国強兵」「忠君愛国」のモットーの許に育った私の中には、戦争は悪だと言うことや平和の大切さ等の考えは少しもありませんでした。当時の先覚者の婦人達からも平和への声は聞えませんでした。今思うことは教育の力の強さです。「鬼畜英米」「撃ちてし止まん」「勝つまでは不足は言いません」等の声が強く流されていました。

昭和十九年頃から日本軍劣勢がぼつぼつ聞えて来ました。私は、勤務動員で召集され、始めは労働に、しばらくして理化学研究所に勤務しました。

当時私共は東京市本郷区蓬莱町に居住しておりました。防空壕も立て穴の深いものを堀ったり、研究が重ねられ家の中に作られたのは危険で止めになり空地につくられました。

空襲の始めの頃だんご坂下の小住宅密集地が爆撃された時、消防団の方が地獄のような状態だ、一見してはと、勧められましたが、行く気になれませんでした。その後東京の中心部が爆撃された時、照明弾の光りの美しさと大きさは打上げ花火の比ではありませんでした。毎晩のように空襲警報があり、防空壕入りを重ねました。空襲の始めの頃は、腰を抜かす人があり、国園の人が大変でしたが、それもなくなりました。

三月十日の空襲は私共の地区から始められ、本郷・下谷・浅草・本所・深川・京橋等と続き大空襲となり、沢山の人が焼死しました。私共のところへは、焼夷弾

が雨のように降り、すぐ燃え始めました。この時、内側は焼けず空襲としては楽な方でした。しかし、近くの消防団員の応援もなく罹災して一昼夜後に乾パン一袋が配給されただけでした。罹災後は心境が一変いたしました。その後、成城に移り、一年程過しました。毎夜のように警報を聞き外へ出ました。私の家からも不発弾が一個見つかりました。

終戦間近くなりました時、艦載機が毎日のように来て見つけられたら直ぐひき返して、機関銃でやられるので、成るべく家の中央にいることにしました。この頃、希望を失って自殺する人もありましたが、人々は少しの物でも分け合う温かい気持ちがありました。

八月十五日に終戦になりました。平和の訪れは、嬉しうございました。茫然自失の方もおりました。アメリカ軍に占領された私共は、まあまあの状態で感謝していました。一方日本軍が東南アジア各国でした実に残酷なことを少しも知らず、この頃になって申訳なさで一杯です。自分は手を下さなくても、深い悔い改めとつぐないをしているドイツ人のように、私共日本人もそうしなければならないと思います。

真の平和はどうしたら来るのでしょうか。これは、ただいまの私の一大課題です。戦争の犠牲は子供や老人、女や障害者等の弱者に皺よせされます。東西の冷戦が終り、ロシアの共産党が壊滅する等驚くことが次々起りました。これで安心かと思っておりましたのに、民族の対立が各地に起り難民が増え、悲しい日々が続いています。

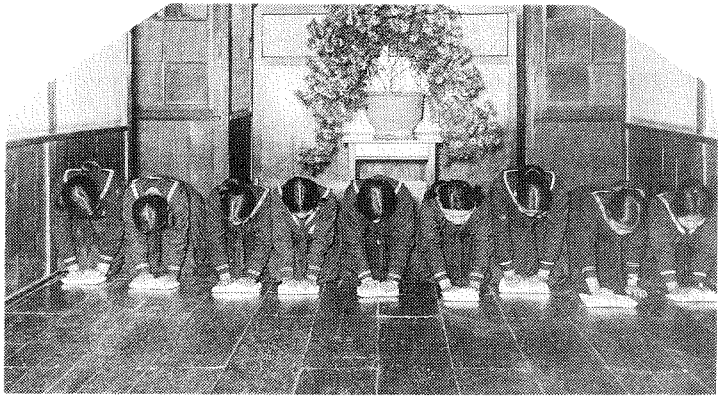
「族長時代」「家父長時代」「封建時代」と男性中心の時代が続きました。政治経済も教育も宗教も男性の考えだけで運営されて来ました。

世界人類の半数は女性です。スウェーデンのように女性の考えが各部門に入ったら平和が早く来るのではないでしょうか。

永い慣習の中から急に女性が役立つか疑問ですが、寛大な心で男性がこれを助け、よい進歩をさせて頂きたい。男女が真の協力することによって更によい社会

が成長するのではないでしょうか。
男性の皆様どうぞよろしくお願いいたします。

（松井ヶ丘在住）



当時の女学校の教室床磨き

戦争の体験と私の想い出

宮嶋勝子（六八）

今日も空襲警報発令のサイレンが、不気味に鳴り響き、戦争は益々激しくなった昭和二十年三月、今日も私は母の着物を染返して作った、作業着モンペを身につけて、カツオ梅干の入った弁当を二つ、それに防空頭巾を入れ草内より田辺郵便局へと通った。電話交換手、重い勤務である。早朝より何回ともなく大阪府・京都府・滋賀県・奈良県に空襲警報発令、解除の繰返しがつづいた。頭上にB29の爆音がバリバリ―と恐しく往復する。夜になり暗い電燈の上に真黒の布を覆って勤務である。ベルに切替え夕食をしていると、けたたましくベルの音、空襲警報発令である。敵機の大編隊なのか、不気味な音と共に見る見るうちに西の空が真赤になった。私は思わず立って空を開けた。目前が火の海のようだ。大阪が焼けている、探照灯が右往左往に光るドドドーン、ドドドーンと照明弾や爆弾の落ちる音が聞える。内地も戦場だ、もう生きている心地もしない、恐しさで一パイである。こんな惨い繰返しがつづいた。

そして六月五日空襲警報発令下、朝宿直の任務を終えて帰り道、草内にさしかかった時、もの凄い音と共に巨大なB29が尾翼から黒煙と火を噴き、右に旋回しながら落ちて来た。落下傘二ツ三ツ降りる。村の上に落ちたらっ……恐怖におびえながら家の軒に身を隠し見ていると、大轟音と共に火柱が上り木津川の河原に落ち、炎上した。村の人々は竹槍を持って走る人、鍬鎌を持って走る人、私は現地に行く心地もせず家に帰った。その年の八月十五日遂に終戦を迎えました。後日大阪に行きましたが、なんと言う悲惨な有様、地獄の町・死の町とも言いましょうか、筆にも言葉にもあ

らわせません。思わず目頭が熱くなり、心より被害者のご冥福をお祈り致しました。

二十一年、局を退職して、その翌年主人と結婚しました。主人の義兄さんも十九年十二月四日、ビルマの激戦で名誉の戦死を遂げられました。遠い異国でどんな思いで、どんなに苦しかっただろうにと、朝夕仏壇に手を合せてご冥福を祈り、一遺族として、いつの世までもお守りせねばと思いました。

そして三十余年の歳月が流れ、五十三年一月フィリッピンツアーに主人と共に参加することが出来、激戦のあったマニラモンテンルパに立寄り、日本軍人墓地にお参りすることが出来ました。日本式に漢字で書かれた卒塔婆が立ち、「安らかに眠って下さい」と書かれた供養塔が幾つも立っていました。多くの英霊のご冥福をお祈りして心残る墓地を振返り振返り帰途についたあの日…そして数年後念願の沖縄へ―私達三姉妹線香と手作りのカーネーションを持って、沖縄ツアーにも参加することが出来ました。戦死者九万人、島民十万とお聞きする沖縄へ、多くの英霊と島民が眠られる霊塔にお参りし、ご冥福をお祈り致しました。激戦の傷跡生々しく残る現地を涙ながらに旅して帰国したあの日……。今も私の心の奥深く残り、忘れることが出来ません。

老人は過去の想い出に生き、若人は未来の希望に生きると、言葉にありますが、若人の皆様、今日ここに世界の日本とも言われ、他の国々と手を繋ぎ、平和に暮して行けます蔭には、あの恐しい戦争、そして多くの尊い犠牲者が眠って居られる事を忘れず、しっかりと永遠の平和を、維持していただきたいとお願いする次第です。

フィリピンツアーに参加して

幾千里荒波越へて今日比島に
将士の墓前に頭(コウベ)あがらず

沖縄ツアーに参加して

手作の花捧げんと沖縄へ
涙ながらに我は旅行く

（飯岡在住）

わたしの戦争体験

佐伯恒子（六九）

満洲事変から日中戦争、太平洋戦争と十五年間に及ぶ長い戦いでした。

「人間の命は牛馬より安い。軍人は徴兵のための一銭五里のハガキ代で集めることができる」と。私の身内から七人かり出され、その内四人が戦死です。戦争ほど悲惨なものはありません。

真実を「知らしむべからず」の国の政策で当時の教育界もマスコミも軍国主義の旗振り役を務めたものです。「日本は神国なり」と神道を中心とした教育を受け「聖戦」と教えられ「日本は必ず勝つ」と信じていたのです。しかし遂に日本の空は完全に米軍に制圧され、神の守りどころか無条件降伏の哀れな姿をさらけました。

当時大阪に住んでいた私達一家は、激しい米軍B29の爆撃に半ば強制的にふるさと広島へ疎開することになりました。荷作り用の縄、板等は当時、家一軒買うより高価で中々手に入りません。やっとの思いで買い集め荷作りして大阪港の川口へ出し、身柄だけ一足先に広島へ帰って荷物の到着を待つばかりでした。しかし何日待っても着かず、父が大阪まで様子を見に行くと、その当りは全くの焼野ヶ原になっていたのです。

ふるさと広島も安住の地ではありませんでした。呉は海軍工廠をかかえる軍港として、また、江田島の兵学校は海軍の駐屯基地として近くに位置するため大空襲による壊滅的な被害をうけました。広島市の中心から約四十キロ離れた私の住む島にも艦載機が執拗に襲い、海兵の宿舎になっていた小学校の運動場の中央に堀った防空壕にピシッピシッと弾を撃ち込むのです。

小学校の教師をしていた私は、男性教師が少ないため一週間に一夜は宿直に当たっておりました。宿直の時は空襲があると指令室から指令が入り、直ちにサイレンを鳴らして村中に知らせる重要な使命があったので、いつもモンペ姿で不寝番です。敗戦の色濃い七月二日、当直の時空襲があり、学校を取り巻くかのように次々焼夷弾が落とされました。焼夷弾の直撃を受けた一家が運ばれてきたので思わず子供の方へ走り寄ってると四年生の女の子でした。口の当りが裂けて言葉も無く目も閉じたままですが、まだ意識はあったのでしょう、「水をあげようか」と言うと、かすかにうなずくのです。割り箸の先に脱脂綿を巻いて少し水をふくませ、口の中へそっと入れてあげました。夜、月が雲に隠れるのを待って、病院へ運ぶ小さな渡し舟の中で、十歳の女の子は息絶えたのです。

そして昭和二十年八月六日、広島に原爆投下。その時、何の警報も発令されていない無防備状態の中で、運動場に出ていた私達は、瞬間、何か異様なショックを受け、皆が顔を見合わせ、思わず見上げた広島市上空の彼方に、はっきりとキノコ雲を見たのです。「空襲だ！」皆が慌てて大声を上げながら校庭の防空ごうに飛び込んだ瞬間、ものすごい風圧が鼓膜を直撃しました。

あれから四十七年。愚かな軍国政府の蛮行に道連れにされ、今なお、その傷跡に苦しむ人々が大勢いるのです。日本語のわからない残留孤児が、名乗り出る親も無く淋しく中国へ帰る姿。原爆の後遺症に呻吟する人々。

戦争ほど残酷なものはありません。

（大住ヶ丘在住）

私の戦中・戦後

太田和子（六九）

私の家は大阪の猪飼野にあり、ここで昭和十九年三月の空襲を迎えた。父と母と私と妹の四人家族。私は二十歳、妹は十七歳だった。防空壕の中で耳に栓をして、ビクビクしながら戸のすき間から、焼夷弾の光りを見る。シュウシュウと音を立てて、まるで花火のように真っ赤になって上空から落ちてくる。川向うのK子さんはどうしているのかなーと案じる。やっと空襲警報が解かれて出て見ると大変!!向う岸は火の海で、川は湯になっていた。その中に火のついた人間が、ドボーンドボーンと飛び込む。まるで地獄絵のように思えた。私の家は、焼夷弾の破片が落ちた程度だったので、すぐ消せた。血だらけの大勢の人たちが裸足で、山へぞろぞろと歩いて行く。女子警防団に入っていた私は、自転車で近くの詰所まで大急ぎで走った。そこにも火傷をした人や怪我をした人が一杯だったので、どの人から先に手当てをしたらよいのかと迷う。お腹の皮がベロリと剥けている人もあり、恐ろしいなどと思ってもいられない。いつもの訓練通りに、救急箱からガーゼや包帯を出して、とにかく何とか応急処置をする。医者も看護婦もいない。

やっと手当てが終わると、急に我が家のことが気になって、飛んで帰る。焼けずに残っていたのでほっとした。毎日毎日が明日の運命も分らない生活です。先の空襲で、淀屋橋の日銀に勤めていた妹が帰れなくなって、父は一日中かかって妹を銀行まで迎えに行ったこともある。上六や日本橋通りも焼けて歩けない。戦争は日に日にひどくなっていく。一晩に三回も警報が鳴ると、靴をはいて頭巾も首にかけたまま一夜中防空

壕の中で過す日も何度かあった。どこの家もガラス戸には白い紙のテープを斜めに貼って、爆弾にやられても割れないようにしていた。

今から思えば、こんな幼稚なことでどうして爆風が避けられるかと可笑しくなる。母の着物はどんどん減って、お米や豆に変わる。現金は相手にされず、物々交換ばかりだった。配給も途絶えてしまったので、朝の暗いうちから山へ出かけ芋や蓬を摘んでくる。それも無くなると、薊をとりに行く。平麦だけのお粥、配給のパンは、真っ黒な粉だったが、まづいものでも口に入れば結構なこと。人間慣れると、案外平気に何でも食べられるものだ。雑炊の券をとるのに朝早くから店の前に行列をつくった。

八月十五日、天皇陛下の玉音放送、敗戦、日本国中が大きな打撃と悲しみで、自分達の明日からの指針もなく、茫然自失の態だった。食糧難はまだ続いた。戦争が終っても続く辛苦、朝早くから母は市場へ行って、小麦粉を分けて貰って、麩粉と混ぜて団子を作り、箱に入れて町の通りで立売りをした。とぶように売れていく。おいしくなくても口に入ればよいという程、人々は飢えていた。煙草を闇市で買って、母と二人で立って売る同じ商売の物が一杯にいる。巡査が見廻りにくると、「空襲警報だよ!!」と口々に叫んで逃げる。恐ろしいというよりもスリルがあって、面白がっていた面もあった。一度だけ母がつかまって警察へ連れて行かれたので、泣き泣きもらい下げに行ったこともある。定職はすでになくなっていたので、生きるために必死だった。運動靴を売ったこともある。時には酔っぱらいにからまれて泣き出しそうになったこともあった。わが家はやっと戦火からのがれて残ったが、終戦一年目に火事に遭った。妹はもうすぐ嫁入りすることになっていたので、花嫁衣装も灰になってしまった。私は着る物もないので、山奥へ女中奉公に行った。戦争ほど悲惨なものはない。物の大切さは充分に身にしみた。折にふれ子供や孫達に昔の物語りとして話してきかせ、平和の大切さを教えております。

（大住在住）

防空壕

中本静子（七〇）

現在、わたしは七十歳。今はとおい昔になってきましたあの頃、大阪市内に住んでおりました。当時は毎日、毎夜、サイレンの日々です。姉夫婦同居の私の親は姉の子供二人つれて田舎の四国へ疎開、久しぶりに訪ねてきた従兄とお互いに無事を喜び、腰を降ろすまもなく、大きなサイレンの空襲警報発令。今までと違った発令の長かったこと。姉がどこで用意したのか、大きな大八車。さあ積むことしきり、縄を架ける手がみんな震えて、従兄も今更帰ることもできず、手伝ってさあ出発。姉と私は大八車のあと押し。道はリヤカー、大八車が所狭しとひしめき、当方は両手で押してるが、中心がとれずあちこちつきあたり。「馬鹿野郎！」とあちらこちらと飛ぶ。一台二台と続く。指導員がメガホンごしに叫ぶ、「早く、早く」。誰もが死んでたまるか、生きるのだと防空壕めざして進まぬごったかえしの道をゆく。先頭の従兄のゲートルの足が震えている。

小学校の前の広場にようやく着く。「早くしないと、爆弾が背中に！」かん高い声が飛ぶ。あちこちの防空壕に「すみませんが、入れてください。」なかから「もう満員です。だめです！」の声で次の防空壕へ走る。この時、姉が大八車が邪魔になるから捨てると言い出したがここまで来るのに大変だったのにという従兄の言葉で車と共にまた走る。

次々と防空壕へ声をかけたが、防空壕の入り口まで人があふれている。その時の私は、恐さでいっぱいで、死の覚悟が出来ず、顔は蒼白、姉が私をぶったように思う。

サイレンはまだ大きく鳴りひびく、もう死んでもいいよと両手で耳に指を入れ地に伏す。耳の鼓膜が破れないようにと、皆が教えてくれたのだ。あちらこちら防空壕からあふれた人は、地に頭をふせ飛行機の爆音を背で聞く。その時の気持ちは、息の根が止まりそう。一機過ぎ、また一機、真上で落下した爆弾は、どの位置に落ちたか皆が震え声でいう。やがて解除のサイレン、「あーあ、長かった、恐かった。」背の汗じっとり、シャツが肌につく。死の覚悟から覚めた人達は、足音重くしづしづと立ち去っていく。

組長が我が家の近くに、空き地を利用して防空壕を掘ることになった。隣組一同、掘って、掘って女の人も掘る。屋根に乗せる土が少し足りないので、その分草を並べる。詰めて入れば三十人分は大丈夫という。我が隣組に防空壕が！歓声があがり、もう空襲は恐くない。誰かがこの柱の古木はどうしたかと聞く。壊れかけの誰も住んでいない家の柱と床板を貰ってきたと笑いこける。元気百倍。老人は感謝する。

二十年三月、空襲が激しくなり、モンペを付けたまま夜をあかす。畳の上は靴のままの生活。空襲のない時は、汚れた畳のうえに、床をひく。靴は枕元。姉がたく千切り大根入りのお粥がとてもごちそうだった。

私の隣組に防空壕が出来たから恐れることはないと、自分に言い聞かせる毎日だ。またも発令のサイレンに懐中電灯を片手に、暗い防空壕に入る。もう満員。知らない人も入っている。奥で早く入らないと命が無いと誰かが叫ぶ。男の人がオシッコがしたいと、入口の戸のかわりにつるしたムシロを開けてでる。オシッコが体の震えのせいか揺れているのを皆入り口で見つめていた。

毎日のように黒く染まった空から木の葉の様に燃えかすが舞い落ちてくる。終戦まで五か月余りの頃のことでした。

（花住坂在住）

孫への伝言

上村　弘（六三）

おじいちゃんが、初めて戦争と出会ったのは小学校三年生の時である。昭和十二年、日本は今の中国と、当時は支那といっていたが、戦争を始めた。支那事変と呼んでいた。たくさんの兵隊さんが支那大陸へ渡って行き、戦争が拡大していった。京都では大演習が行われ鉄砲や機関銃を持った兵隊さんがあふれ、戦車まで出てきて本当の戦場のようなありさまであった。この演習の終了式が京都四条の大丸前であるというので友達と見に行ったことをおぼえている。戦車も機関銃も兵隊さんもみんなかっこよく見えた。戦争の恐ろしさやみにくさは、三年生の私にはまだわからなかった。

昭和十四年になると支那事変も益々拡大し支那の奥地まで日本軍が攻め込んでいた。そのような状況の時、兄に召集令状がきた、京都第八連隊へ入隊することになった。兵隊さんの種類には色々あって、歩兵、砲兵、工兵、航空兵、通信兵、衛生兵などがあったが、兄は砲兵でしかも野砲といって大きな砲を扱う兵隊さんであった。しばらくの間伏見の連隊で訓練をしていたが、いよいよ支那大陸へ渡り戦争のまっただ中へ行くことになった。出発の日、京都駅からどこかの港へ行くという連絡があったので、東本願寺の前あたりで会えるかも知れない。母と私は出かけて行き待っていた。ザックザックという足音が聞こえてきて、しばらくすると、たくさんの兵隊さんが列を組んで歩いてきた。皆カーキー色の軍服を着て戦闘帽をかぶり鉄砲をかついでいる。戦争に行くのだからもう二度と会うことが出来ないかも知れない。私は目を皿のようにしてさがした。兄は片手を少し上げて通り過ぎて行った。言葉を

交わすことも出来ない。母もじっと兄の後姿を見つめていたが涙は流さなかった。ただ私の手が痛いほどにぎりしめていた。

昭和十六年になると太平洋戦争が始まった。支那大陸だけではなく、フィリピン、マレー半島ジャワ、ボルネオ、タイと東南アジア全域が戦場となったのだから、物資は足りなくなるし兵器も足りない兵隊も足りない状態になってしまった。私も中学生でありながら尼ヶ崎の軍需工場へ動員された。

昭和十九年になると戦争は益々日本に不利となり、毎日のように空襲警報が鳴り、アメリカの飛行機が飛んで来て爆弾を落して行った。尼ヶ崎も毎日のように爆撃を受けた。夜勤が明けて寮で寝ていると空襲警報が鳴った、また空襲警報かと思いながら窓から空を見上げるともう頭の上にグラマン戦闘機が飛んできていて、機銃掃射を始めた。バリバリという音と共にヒュンヒュンと弾丸のとんでくる音がする。あわてて防空壕へ入った。暗い穴の中でじっとしていると、ズシン、ズシンと振動が伝わってくる。近くに爆弾が落ちているのだ。生きた心地ではない。ただ自分の入っている防空壕に爆弾が落ちてこないように祈るだけである。爆弾の音が遠のいたかと思うと、こんどは焼夷弾が落ちてきた。私の寮にも落ちてきて、屋根をつきぬけ一階の部屋で青白い火の玉が花のように広がっていた。近くにあった消火器を持って行き、吹きかけたが消えなくて、火は見る見る燃え広がり、たちまち大火事となってしまった。私が持って行ってた本も服も荷物は全部焼けた。

荷物の全部が焼けてしまった私は、外泊がゆるされた。家に帰って見ると、父がもう寝たきりになっていた。食事が進まず、衰弱がはげしかった。母がどこで都合をつけてきたのか、コンニャクの煮たのを私が父の口元へ持って行くとうれしそうに口に含んだ。それが父と会った最後であった。父は何もしゃべらなかった。父は自分一代で築き上げた家業を男四人の子供の誰かに継がせたかったにちがいない。しかしそれは戦

争という思いがけない力で打ちくだかれてしまった。四人の子供は全部兵隊や動員で取られてしまうということは全く予想外であったろうと思う。空襲警報の下で、年老いた父と母とがどれ程心細い毎日を送っていたか、それを思うとたえられないほどの心の痛みを感じる。

（田辺在住）